

# 猫 蓑 通 信

第 89号

平成 24年  
(2012年)

10月 15日発行  
(年 4回発行)



## 猫蓑会式目の改定

青木秀樹

このたび複数の会員の方から猫蓑会式目について問題点の指摘を受けた。その論点は、

- a 体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う
  - b 漢字止めまたは仮名止めの五連続を嫌う
- が両立しており、連句の座での混乱を生んでいるということである。このaとbとは文法的にも、意味的にも違うもので、式目が改定されたのかどうかを問うものであった。

全くその通りであり、先生が「体言止め」を単に「漢字止め」と言い換えられたととった私の不注意による誤りであった。会員のみなさまに混乱をお詫びしなければいけないと思う。この間の経緯について私を知るところを開示して、会員各位ご理解をいただきたいと思う。

猫蓑会において「式目」が発表されたのは平成七年「猫蓑会の式目の整理」として東明雅先生が「猫蓑通信」第21号の巻頭に書かれたことに始まる。aの「体言止め・用言止め」はこの「一巻の構成」の中に示されたものである。

その前文に「式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである」と記されているように、標準的な基準を示すことで「猫蓑式の連句の仕方」を共有しようとの意図であったと聞いている。猫蓑会発足から十三年、誰でも参加できる猫蓑会に改組してから五年経過した時期であった。朝日カルチャーセンターの受講生が増加し、それとは別に連句に興味を持った会員を取り込む中で、明雅先生が一座して直接指導を行うことが限界を迎えた頃であった。

上記b「漢字・かな」は「猫蓑通信」第49号(平成十四年十月)の明雅先生の巻頭文「文音と校合」の中に書かれている。これは明雅先生と若林文伸さん・島村曉巳さんの三吟の集合校合の結果を記したものであった。

この頃、新しく出版された連句・俳句季語辞典『十七季』の連句概説と猫蓑会の式目の関連等について会員からあれこれ質問があり、明雅先生はその対応に苦慮されていた。そんな中で「体言・用言」がわかりにくい、チョコレート・サツカーは体言、哉・也は用言でしょうなどという声に対して「漢字止め」という考えが先生の頭に浮んだようである。先生は「脇は韻字(漢

### ●目次●

第二十二回猫蓑同人会作品 歌仙七巻

蕉風俳論抄 先づは大かたにしてよろし

第二百二十二回猫蓑例会作品 歌仙八巻

芦丈連句と芭蕉の心法 東明雅

式目の簡素化と嚴格化・芭蕉の式目観

東明雅

温故知新8…名を正す 俗談平話を正す

事務局だより

字)で止めるのがよいといわれる(『十七季』)など、この頃は「韻字止め」という言葉をよく使われていた。韻字ではますますわかりにくくなりますと申しあげたこともあった。

「体言・用言」については音読するとわかるが、用言止めが続くことは「すべる」といわれ、だから続けているように感じられ、また体言止めが続くとぶつ切れるように感じられるので、一巻の構成上好ましくないと考えられたのである。一方「漢字・かな」は懐紙面の視覚的な偏りを嫌うことから来ている。

結論として、私はそもそもその式目aに先生がその後提起されたbを加えて、「体言止めまたは用言止め、および漢字止めまたは仮名止めの五連続を嫌う」と改定することが望ましいと考えるが、いかがであろうか。

2 5 6 10 10 11 12

1・大瑠璃の座

歌仙「菖蒲園」

東 郁子 捌

菖蒲園故郷の銘も中に在り 郁子

梅雨の晴間に賑はへる人 久美子

厨房にシチューを煮込むシェフのあて 酔山

英字新聞広げ見る時 曜子

新名所塔の先端昇る月 良子

鳥の渡りに拵る歓声 曜

ウ 今様の行水なごりシャワー浴び 久

ドアのノックにときめかす胸 山

抱き合へるふたり伺ふ猫の目よ 良

外国帰り浜の仕立屋 山

大伯母はバイブルいつも座右に置き 良

ステンドグラスばかり撮る趣味 久

山の端を照す寒月ふり仰ぐ 曜

賓客のあり勧む鱒酒 山

道場は竹刀激しき音響く 同

さつと過ぎ行く川よりの風 曜

訪ねたり河津桜の始祖の花 久

児ら戯れる春泥の庭 良

ナオ 鯛網の唄も聞える漁師町 山

孝行息子俺の後継ぐ 曜

アスリート五輪連覇を目指したる 良

金も石油も乱高下して 山

古川の絵付蠟燭大切に 曜

玻璃の簾に見ゆる幽霊

縁台に君の面影慕ひつつ

プロポーズする太きバリトン

ケーブルカーフニクリフニクラすれ違ひ

一人旅とて気軽気儘に

瞑想の月を背にして結跏趺坐

草むらかすか邯鄲の声

ナウ 路地裏に海贏回しする爺もをり

濡れ煎餅を銚子土産に

句碑となる七番日記一茶の書

飛行機雲の西へ流れる

見はるかす夢かとはかり花万朶

白き自転車漕ぎてうららか

曜 連衆 副島久美子 吉田酔山 前田曜子

本屋良子 本屋良子

2・白鷺の座

夏蝶といふ二頁が開かるる

マロニエの咲く道の両側

ウエイターまづはメニューを届け来て

いつも賑やか子供等の席

山の端にまんまる顔のお月様

置いた扇に銀の流水

シテはいま紅葉の舞を踏み出せり

脚のしびれに困るお見合

警策が幻の君追ひ払ふ

原田千町 捌

夏蝶といふ二頁が開かるる 千町

マロニエの咲く道の両側 了斎

ウエイターまづはメニューを届け来て 碧

いつも賑やか子供等の席 芙美

山の端にまんまる顔のお月様 昭

置いた扇に銀の流水 斎

シテはいま紅葉の舞を踏み出せり 碧

脚のしびれに困るお見合 斎

西海岸に吹く碧い風

歴史から緋く深いDNA

寒猿の貌わが祖父に似る

谿間を下る孤舟に冬の月

目利きが選ぶ端溪の石

また電話子のない家へオレオレと

サランラップでチンをする飯

天地をおもひのままの花吹雪

蝸蚪の王国革命もあり

ナオ 麗かにピアノを運ぶクレールン車

禁煙やぶりそつとくゆらす

歌舞伎座の柿落しを待ちに待つ

綴れの帯を新調の母

炎天に撥もつ指のまだ達者

裸の背の鯉が愛しい

遠江罪ある人の名を呼ばふ

男と女だけの世の中

第三の性もあるよと小さき声

表裏解らぬクラインの壺

月明り葦の波に打ち寄せて

天井板に唐辛子乗る

ナウ 炉火欲しとふと口に出る独り言

またも見つけた靴下の穴

エレベーターエスカレーター螺旋階

今日も謎追ふ私立探偵

移ろひの世に花のみのやさしかり

犬の散歩は風光る中

同 美

同 斎

同 碧

同 同

同 同

同 同

同 同

3・目白の座

歌仙「梅は実に」

上月淳子 捌

止みさうで止まぬ糠雨梅は実

淳子

目白の姿現はるる枝

文字

子に作る積木は角を丸くして

明子

くるくる折つて貰ふ長袖

恭子

月高く散歩途中で寄る本屋

鄭和

イヤホンで聴く曲の爽やか

明文

ハローウイン籠いっぱい配る菓子

明文

魔女の中身が君と分ならず

和明

愛犬の嫁はすぐにも決まるのに

明

門の蔭からのぞく元彼

恭文

整形もせう変貌十七年

恭文

くつきり残る雪の靴跡

恭文

LEDイルミネーション月冴ゆる

明文

ヒカリエ劇場柿落しに

明文

大砲開ければすべて化粧品

恭文

旅に出る日も部屋は散乱

和文

待ちわびし三春の花は今盛り

明文

田螺佃煮ちよいと一杯

明文

ナオボートレースビルやタワーの街望み

明文

居職に生きて出来た擦り胼

同

お稲荷さん片手拌みに通りすぎ

淳

選挙区替へて立候補また

恭文

母上に仕草そっくり麗しく

文

平成二十四年六月十七日  
於 新宿ワシントンホテル 新館

恋患ひを治す温泉

馴初めは雷いやと抱きつかれ

恭

スパイと知らず濃厚な刻

同

正社員わざとならないフリーター

恭

億の夢追ひ宝くじ買ふ

和

一戸建月のかげらの屋根に降り

恭

墓の掃除は長男の役

同

ナウ冬を待つ片言話す外国人

明

B級グルメを探すパソコン

文

体重も血圧も書く棒グラフ

恭

留袖服に縫ひ直す刀自

文

花は霏々古刹の鐘の殷々と

和

上海からは亀鳴くと文

淳

連衆 橋 文字 野口明子 式田恭子

文

高山鄭和

和

4・黄鶯の座

歌仙「銀の弾力」

遠藤央子 捌

背の筋の銀の弾力貼はしる

央子

初颯の響きある谷

常義

遠来の客に顎鬚自慢して

美奈子

やつと覚えた二重縄跳び

一枝

月まろし新造タワーの middle に

路子

休暇明けてはものを干す路地

義

ウ 爪弾いて留守居も楽し冬隣

義

噂千里の理由ありの女

奈

黒タイツバーカルメンはよく流行り

義

手櫛どとかすきぬぎぬの髪

凍蝶の双つ張りつく月の窓

奈

郷隼人てふ歌詠みの冬

枝

新聞は後ろから繰る兄の癖

同

地下に潜つたはずの大ボス

奈

シンプロントネル抜けてイタリアへ

義

言葉はかろし辞典重しと

奈

年経ての机ひろる花あかり

義

ぼんと幼なの越ゆる春泥

路

ナオ泣かないぞ種痘の針は太いけど

枝

発明展にもらふ商談

同

源内の此の世の嘆き「根南志具佐」

奈

補陀落の海渡御の幸せ

義

陶枕を抱けば艶夢の七彩に

奈

持たぬ乳房に恋を疼かせ

路

幾千年噴きつけをり毒熱湯

同

クレッシエンドとテクレッシエンド

枝

捨ててきた時の記憶の偏頭痛

奈

女王陛下の酒杯溷らさじ

同

堀の橋士官馬駆る月昏し

枝

秋の簾の揺れてそのまま

義

ナウ林檎剥くバイト帰りの四畳半

同

韋駄天神社誓ふ健脚

奈

武蔵野の忘れ水行くどこまでも

義

あの人この人みんな鬼籍に

路

花を追ひ花に狂ひてはや傘寿

中央

静かに眠る浅蜷蛤

枝

連衆 生田日常義 鈴木美奈子 西田一枝

倉本路子

5・駒鳥の座

歌仙「猫の会」

大島洋子 捌

梅雨空やぬれたくはなし猫の会

盛り重たき紫陽花の房

パステル画グラデーシオンを念入りに

日がな一日チエロの練習

さざ波は月の光に寄せられて

みち糸攫ふ往く秋の風

鎌祝酒の肴は地のものと

ひよつとこ面に袖を引かれる

しどけなく乱れし今朝は恥かしく

箱根細工はすぐに開かない

原発の安全神話敷の中

目隠し鬼で遊ぶ子供等

鷹放つ拳握るか雪の原

孤独色した寒天の月

あの人はモディリアーニが好きだった

しょうゆ顔とかソース顔とか

村々を覆ひ逆巻く花嵐

大念仏の声の高々

ナオ 蜂飼ひの子の転校は幾度ぞ

メモリーチップに託す情報

病歴を覚え切れぬがわが自慢

三途の川はこの町の川

蛇の巻く恋の恨みは鐘を焼く

洋子

孝子

葵

士郎

わこ

孝

わ

葵

士

わ

葵

葵

孝

葵

孝

洋

士

わ

孝

同

士

葵

士

じれつたいわと脱がすステテコ

内戦はあれもこれもと漁りあふ

初湯に入り想ふ哲学

七十路の五体九竅健やかに

ひっくり返って笑ふジョーカー

月青しアツピア街道輸濃く

歴女も聴くか蟋蟀の声

ナウ 銀杏を踏めば臭へる学習院

四十五度でおじぎ交はして

この頃はワイド画面の夢を見る

匠静かに鑿を研ぎつつ

花衣山姥の頬淡く染め

紙鳶には君のざれ唄

連衆 坂本孝子 石川 葵 横井士郎

横山わこ

孝

わ

同

孝

同

士

わ

葵

同

士

わ

洋

わ

6・翡翠の座

歌仙「五月雨や」

鈴木千恵子 捌

五月雨や万物の色新たにす

葉陰に眠る小さきでで虫

探検隊洞窟の奥探りゐて

木皿に溶いた岩絵具なり

父がまた引越すといふ十三夜

生り始めたる柚子のおほばか

独身も長く続けば爽やかに

なぜにもてるかあの地味な女

さりげなく誘って見たらついてきた

千恵子

秀樹

有子

和代

鐵男

志世子

樹

有

代

Y字路だけの写真集出て

埒もない会議延々中継に

その犯人はすぐそばに居る

雪催ひ露天湯ひとり仰ぐ月

狐がこんと佯ぶる山峽

鉄橋を渡る車窓に映る海

留學生がなにかとつとつ

花を浴び赤い鳥居をくぐりをり

秀吉の城隈ぶかげろひ

ナオ 春惜しみすぐに始まるジャムセッション

コンビニで買ふ差入れの菓子

やや強き地震あり震度4なりき

乱視矯正眼鏡誂へ

アロハシャツ上手に隠す太鼓腹

うまいだらうと泡盛を注ぐ

不惑として恋の噂に血が騒ぎ

いつもめろめろとけてしまふの

選挙区はこんな私を迎へ入れ

高枝にある鴉の早贄

序破急のいま急のとき月天心

定期検診秋冷の道

ナウ 夢語る少年の眉濃々しくて

初の飛行機ニューヨークパリ

一ドルが三百六十円の頃

木造校舎残る落書

稜線の雲と見紛ふ花の山

手に地球儀を回す永日

連衆 青木秀樹 佐々木有子 長崎和代

林 鐵男 秋山志世子

有

代

樹

有

男

樹

男

世

有

代

世

代

樹

有

同

有

男

世

代

樹

代

世

有

樹

千

男

7・時鳥の座  
歌仙「舟遊び」 松島アンス 捌

テムズ沸く女王陛下の舟遊び アンス  
つば広帽はガーベラの色 泉水  
画材店秘蔵の名画店頭 暁巳  
珈琲豆の焙煎に凝り 冬乃  
小さき旅田毎の月を賞づる宿 雅子  
障子を洗ふ姉と妹 雅  
鳥渡る山椒太夫非道にて 巳  
丹後往還織姫の里 乃  
日参のハローワークでひよんな縁 巳  
次の手順はデジタルでいく 泉  
原発の稼動に民の首傾げ 乃  
暖炉に燃やす薪一本 雅  
悴んだ青猫抱き仰ぐ月 泉  
防犯カメラかいくぐつては ア  
カチンコを鳴らし百歳了へし人 泉  
瀬戸内の鳥穂やかな風 雅  
花吹雪全校生徒並ばせて 乃  
春の唱歌をCDで聴く 巳  
ナオ遊園地猿の電車のもどかなり 泉  
戦の記憶持たぬ若者 乃  
東京発「カワイイ」世界征服す 同  
ミジンコ時に全て雌にて 巳  
大盛りの土用鰻を食べる夢 雅

平成二十四年六月十七日  
於 新宿ワシントンホテル 新館

浴衣の柄を選ぶ閑取

あの角に砂かけ婆が待つてゐる 泉  
産業道路ダンブ疾走 巳  
ケータイに囁くブレーキ踏まぬ恋 乃  
再々婚もみんな歓迎 雅  
ご本陣一統集ひ月の宴 巳  
松風さやかビルの茶室に ア  
ナウジバングで友と見にゆく菊人形 巳  
昔の記憶いつも美し 雅  
古楽器の小編成の音楽会 泉  
LEDの光ほのかな 乃  
道の神花の笑まひに抱きあひ ア  
目交ひを舞ふ双つ蝶々 雅

連衆 青木泉水 島村暁巳 百武冬乃

武井雅子

蕉風俳論抄 先づは大かたにしてよろし

詩歌連俳はともに風雅也。上三のものは餘す所もその餘す所迄俳はいたらすと云所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する縁の先と、まだ正月もおかしきこの比を見とめ、又、水に住む蛙も、古池にとび込む水の音といひはなして、草にあれば中より蛙のはいる響に、俳諧を聞付たり、見るに有。聞に有。作者感るや句と成る所は、則俳諧の誠也。

俳諧の式の事は、連哥の式より習て、先達の沙汰しける也。連哥に新式有。追加ともに二條良基撰政作之。今案は一條禪閣の作、この三つを一部としたるは肖柏の作と也。連に三と數ある物は、四とし、七句去ものは五句となし、万俳諧なれば事をやすく沙汰しけると也。今案の追加に、漢和の法有。是を大様俳諧の法とむかしよりする也。貞徳の差合の書、その外その書、世に多し。その事をとへば、師信用しがたしと云り。その中に俳無言といふ有。大様よろしと云り。差合の事もなくては調がたし。

師の門にその一書あれかしといへば、甚つゝむ所也。法を置と云事は重き所也。されども花のもとなどいはるゝ名あれば、其法たてずしては、其名の詮なし。代々あまた出侍れど、人用ひざれば何んが為ぞや。法を出して私に是を守れとは恥かしき所也。差合の事は時宜にもよるべし。先づは大かたにして宜と也。たゞこゝろざしある門弟は、直に談じて信用して書留るもの、密にわが門の法ともなさはなすべし。

『三冊子(白さうし)』土芳  
元禄十五(一七〇二)年刊



格に入りて格を出ざる時は狭く、また格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り、格を出てはじめて自在を得べし。

『俳諧一葉集』に収録された芭蕉の言葉。  
文政十(一八二七)年刊



1・揚羽の座

歌仙「猛暑かな」

坂本孝子 捌

大川の光押しゆく猛暑かな

孝子

芭蕉の花の垂れてゐる門

恭子

ユニホーム球児は声をかけあつて

昭

和音楽しむ女子のコーラス

郁子

宵の月空には鳥の道あらん

啓

忘れ扇がバスの座席に

昭

ねふた曳く裏はいづれも美人の図

郁

腕頼もしき村の若い衆

恭

夢なのか妄想なのか恋なのか

同

神経質を治す日本酒

昭

丹精の病院食の隠し味

郁

杜の奥処に燃ゆる狐火

恭

年の瀬の月を背負ひて出奔す

郁

遙かに望むギリシヤスニオン

恭

国宝はセンサー付きの鍵をかけ

昭

ちんと止まりし電子調理器

郁

打ち連れて洛中洛外花巡り

啓

ガイドの伸ばす語尾のうららか

同

ナオ 永き日のまだ国籍は取れぬまま

恭

寄付は必ず秘書を通して

同

別荘の番は爺やと乳母の役

郁

浅間山肌登山者の列

孝

せつせつと蟻が運べる蝶の翅

孝

長身白皙出逢ふ仕合せ

郁

特ダネは情を通じて得たらしい

啓

今もライカを可愛がる奴

昭

すきやきの卵は一人一個まで

恭

時雨の音は故郷の音

同

方丈を照らす真如の月の影

昭

菊人形をつくる四阿

恭

ナウ 三陸の港に願ふ豊の秋

郁

町長さんは作業着のまま

啓

あの頃はみな憧れたベンチヤーズ

同

横断歩道家鴨ご一家

昭

花吹雪優勝杯を高らかに

孝

子の手握る赤い風船

執筆

連衆 式田恭子 松原昭 東郁子

執筆

小池啓子

執筆

2・鍛形の座

歌仙「圧してくる」

鈴木了齋 捌

圧してくる雲押ししかへす青葉かな

了齋

振舞水へ群るる人波

良子

縄のれん小腹空いたるやうな気に

碧

むくむくの犬足にじやれつく

佐紀子

月の出にをところ爪弾く生ギター

良

ロココの窓に新涼の風

齋

ウ 隠元の豆の大きさ如何ならん

佐

小説めいた恋にあくがる

碧

ふたりして秘かに試すあれやこれ

齋

殿出陣の後に産むお子

良

尋めゆけどはるかに遠き高野山

碧

水に冬木を映す月影

佐

くつさめの続きで誰かわが噂

良

活断層も地震も見ぬふり

齋

中継のテレビ画面に死の巷

佐

満漢全席流連荒亡

碧

恍惚のこの身を包む花の渦

齋

小綬鶏の尻見えつ隠れつ

良

ナオ 亀鳴けば田螺こたへる畦の径

碧

三角ベース歓声の湧く

佐

のぼさんと真之さんは好敵手

良

露西亜娘の金髪を愛で

齋

絵の中のやうに裸の君とゐる

佐

ひらかなめいてなかれゆくかは

碧

うたかたの浮世の底をひたすらに

齋

スルフォラファンに頼る毎日

良

マフラーとマスクにいつも身を固め

碧

十七年をただ逃げた奴

佐

葛橋ゆさゆさ渡る月今宵

良

秋天に空く異次元の穴

齋

ナウ ハロウインの子等の驚きいつまでも

佐

パンダの檻の前にしづまる

碧

大切な理由が紙面の片隅に

齋

一家の理由は深酒といふ

良

一目千本蔵王権現神の花

碧

ぽんと投げたる春の手袋

佐

連衆 本屋良子 松本碧 間佐紀子

※プロッコリーのもやし。抗酸化、解毒作用を持つ健康食品。

3・花潜の座

歌仙「図書館に」

佐々木有子 捌

図書館に涼しさのみを借りに来る 有子  
 声は聞かぬが残る空蟬 秀樹  
 磯料理庖丁捌き習ふらん 雅子  
 檜の香り乗せるそよ風 鄭和  
 旅の果月の出を待つ野天の湯 樹  
 山へと続くこれが猪道 有  
 球場の壁にからめる蔦紅葉 和  
 ひっきりなしにiPhoneの鳴る 雅  
 ままごとのやうなふたりの夕ごはん 有  
 寅と申とは相性のよく 樹  
 八雲立つ出雲の国に神集ふ 雅  
 人疎らなる月の蕪村忌 和  
 日はすでに西に傾き酒恋し 樹  
 あすの天気を告げる有線 有  
 掘割の舟を舫へる石の杭 和  
 ふらり立ち寄るスターバックス 雅  
 花の雲上野のパンダ幸あれと 同  
 將軍墓所に囀の降り 樹  
 ナオ 春闘に親子笑顔の肩車 有  
 長続きせぬ技の後継ぎ 和  
 やや難のある双発機やつてくる 樹  
 読めぬ漢字をむにやむにやと言ひ 有  
 上海の租界を睨む謎の首領 和

平成二十四年七月十八日  
於 江東区芭蕉記念館

深きスリット白き腿

俺だけが世話できるのさ君は蛇

割箸まはし作るわた飴

糖尿病食後三錠薬飲み

ケアマネージャーけふも休日

月上る雅楽に合はせ舞ふごとく

忘れ扇の置かれたる椅子

ナウ 鮎の焼ける煙に涙して

ふと口遊ぶゴンドラの唄

金メダルみんな夢みてロンドンへ

下町食堂いつも満員

生涯をかけ街道に植える花

子安貝など拾ふ砂浜

連衆 青木秀樹 武井雅子 高山鄭和

4・羽蟻の座

歌仙「万物の」

林鐵男 捌

万物のさまあざやかに晩夏光 鐵男  
 堤の上に雲の峰立つ 千恵子  
 しっかりねマツト運動声かけて 淳子  
 着地成功笑顔こぼるる 徹心  
 丸き月宇宙への夢育みぬ 惠  
 プレパレートにはさむ初茸 男  
 粧へる山の懐湯の煙 心  
 誘はれずぐに乗ってしまった 淳  
 トラックへ所帯道具を運び入れ 男

どこの姉妹も下が美人で

刈り込まれ綺麗な垣の細雪

読書三余の窓に寒月

ベリージャム紅茶に溶かす銀の匙

毒薬を盛る謀臣があり

清張は最後の場面まつ浮かべ

ズームアップで映す廢線

花の旅ベットボトルを携へて

あやつる網にあまた春飛

ナオ 門前町賑々菜飯が評判に

ピンクスニーカー走る砂利道

やうやくに掛かった橋をわくわくと

百夜通ひの報はるるとき

クリムトの接吻真似る若き人

うっかり誓ふ死がわかつまで

一片の理性残して酔ひどれる

愛犬背に登山勇まし

滴りを互みに掬ふ切通し

いざ鎌倉へひづめ夏々

月照らせなくした銭を見つけたく

稲荷を拝すやや寒の中

ナウ 親と子の情身に入む土人形

フェイスタオルに匂ふ石鹼

宿泊の度に灰皿持ち帰り

千人斬りを悲願とぞする

遅刻坂走る学生花浴びて

地平線まで跳ねるぶらんこ

連衆 鈴木千恵子 上月淳子 佐藤徹心

5・初蟬の座

歌仙「晴れやかに」

橘 文子 捌

記念誌に師の終の巻百合香る

文子

初心に返る梅雨明の頃

アンズ

宿題の微分積分やりとげて

士郎

野菜料理の煮上りし鍋

志世子

月昇るマチネーはねし街の角

達子

双眼鏡に渡り鳥入れ

ア

ウ 段重ね千木管を買ふたらだら祭

彼の好みのドレス選ばせ

士

脇道に外れた処隠れ宿

ア

始発電車を待つてゐる駅

達

有明に冠雪の富士望みたり

世

野兎跳ねし跡が点々

士

太き筆画仙紙に書く一文字

ア

ロンドン五輪メダルめざして

世

美酒を友と肩組み酌むならん

士

寮歌祭の日決定の報

達

若人等晴れ晴れくぐる花の門

士

大羽鯛の大漁旗立つ

ア

ナオ お蚕様は宮中育ち小石丸

達

シルクロードを描きし生涯

ア

旅遙か夢と無常の絢ひ交ぜに

世

頭痛腹痛治す薬草

士

天邪鬼時々出でてそそのかす

世

少年少女の夏は来れり

達

見つめあふふたりの間に氷菓溶け

同

絡み絡まれ堕ちむ煉獄

士

面影を永久に慕ひてオランダ人

同

風轟々と大樹吹かるる

ア

薄青き月光世界に独り醒め

同

目にも爽かに仏塔の影

士

ナウ 涼新た脱原発デモ二十万

ア

くれない族の託ちあふ老い

世

Live r 刺の食ひ納めとは殺生な

達

宝籤てふまがり鉄砲

文

花霏々とヒツグス粒子発見す

同

風々揚がれ送る声援

世

連衆 松島アンズ 横井士郎 秋山志世子

篠原達子

6・水馬の座

歌仙「勇み太鼓」

捌

鈴木美奈子

梅雨明や勇み太鼓の聞えくる

美奈子

鎮守の池に遊ぶ亀の子

暁巳

シヨーウインドウ マネキンの顔横向きに

霞

大き荷物を両手いつぱい

曜子

月ひとつ残し隊商発ちてゆき

路子

音もたてずに澄めるオアシス

路

やや寒の封切館に f i n の文字

巳

恋の五十鈴の永遠の道行

霞

歯科医殿すべて見せます繕へぬ

曜

外れし顎を戻す早業

路

鮫鱈の吊し切りされ御徒町

曜

ケーブル揺らす風の月

霞

オリンピック金か銀かで賭けをして

巳

走る号外どよめきの中

霞

旧名の懐かし都電停留所

巳

若手歌舞伎の見得も凜々

奈

花の関人の情の身に沁みて

巳

渡る世間の鬼もうららに

路

ナオ 永き日の鯉ゆつたりと擦り躱し

霞

離反相継ぐ時の宰相

曜

北鮮に何か起こつてゐるらしい

路

雷神はどこスマホ贈らう

曜

かみ 天牛の空を見上ぐる枝の先

巳

あの泣きぼくろちよつと気になる

奈

男女組今の女房が級長で

巳

包んでくれた穴の手袋

路

満洲里ロシアンティとペーチカと

巳

リリーマルレーン ハスキーな声

霞

夜行便月を掠めて成層圏

曜

地球帰還は馬肥ゆるころ

霞

ナウ 盆荒れて島の男のひとり酒

同

秘伝のくさやTV画面に

巳

姿消す学生街の古本屋

路

ステッキつけば風のやはらか

霞

花の世の余白たのしき旅衣

奈

仔猫に夢を語る少年

曜

連衆 島村暁巳 高塚霞 前田曜子

倉本路子



7・玉虫の座  
歌仙「路地多き町」 生田目常義 捌

凌霄花のつげんや深川は路地多き町 常義  
 浴衣着ゆふぎこなしすれちがふ人 央子  
 滴りの翡翠とはなる茶を入れて 千町  
 キーホルダーを手土産に出し 健  
 今宵また松の枝越三日の月 央  
 渡り廊下がちちる虫聞く 義  
 美術展プラチナチケットゲットする 健  
 ウ 王と並びて異国の美女 町  
 緑眼の君の紅唇白き肌 義  
 夢が醒めればあつと宿題 央  
 三寒の後の四温に子等歌ふ 健  
 月の冴えには志野のぐい飲み 町  
 選手われ調整万全ロンドンへ 央  
 頬押しつけてフライトの窓 義  
 扉開け宇宙飛行士抱き合ひて 健  
 企業戦士の何気ない様 義  
 花篝駒をなだめる大手門 町  
 雛の餅のちよつとゆがんで 央  
 ナオ よく廻る水子供養の風車 健  
 隠し階段登り芭蕉碑 町  
 天才といはれて今はただのひと 央  
 レンズを磨く入魂の技 義  
 熱帯魚飼へば飼ふほど可愛くて 健

平成二十四年七月十八日  
於 江東区芭蕉記念館

銀の水玉遊ばせる蓮  
年上の女は恋に大胆で  
チヨイ悪坊や掌に乗り 義 町  
拭き減りし格子の木目小晦日 央  
痛し痒しの皸の痕 健 町  
ふるさとをはるかに偲ぶ良夜なる 央  
天下の美味は母の煮た芋 義  
ナウ はたはたと大漁旗立て鯛船 健  
アーメン終始余韻長々 央  
ニニ・ロツソ惜別わかれの歌に皆唱和 義  
上手投げしてじいじ負かした 央  
風ありて飛び翔たたすらん花の精 町  
外輪山を眺めのどらか 健

8・蜉蝣の座  
歌仙「梅雨夕焼」 山本要子 捌

梅雨夕焼富士の裾野の海に入り 要子  
 今を盛りに虎杖の花 久美子  
 深呼吸スポーツドリンク一息に 忠史  
 連続ドラマ流し目で見ると 泉子  
 月昇る時に帰る鳥の群 敦子  
 子に教へつつ障子貼る父 泉  
 耳澄ませ遠くに聞こゆばったんこ 史  
 手を差し出され渡る小流れ 久  
 巻紙に以後の次第は描いてあり 泉

お陰様にてこども十人  
金正恩常に連れ添ふ女ぬて 久  
凍りついたり国境の月 史  
窓辺にはポインセチアの紅い色 泉  
計りますよでお腹ひっこめ 敦  
正直が時には仇となることも 史  
のら猫いつも庭に出没 久  
鳥取の砂丘に花の一枝置く 同  
絆の字書く八間の風 史  
ナオ さば読んで青春切符うららかに 要  
大道芸人出自いろいろ 泉  
ダルピツシュ所変ればよくしゃべる 敦  
公聴会のやらせ発言 史  
炎帝は熱中症で寝て居ます 泉  
孫にもらった柄のすててこ 史  
鬚もじゃで胸毛豊かな男振り 久  
ぬらりひょん出てからめとる恋 泉  
除染には自衛隊員動員し 史  
癖になりたるアロマセラピー 久  
地藏盆バイクで抜ける月の道 泉  
村のはづれに色変へぬ松 史  
ナウ 釜いっぱいふつくら炊けたきのこ飯 敦  
へば碁打ちつつ昔話を 泉  
池作り庭に我が家のピオトープ 久  
どげう出てきてこんにちはする 史  
花明り終りはいつもどんと晴れ 要  
黄色帽子の遠足の列 敦

連衆 副島久美子 根津忠史 青木泉子  
武井敦子

## 芦丈連句と芭蕉の心法

東明雅

平成十一年（一九九八）年四月十五日発行

「猫蓑通信」第三十二号より転載



質問コーナー

【Q】 前には（第二十八号）根津芦丈先生との出会いのことについてうかがいましたが、芦丈先生の連句の特徴や面白さというのはどこにありましたか。

【A】 芦丈先生の捌きは、第一に付けと転じを重視され、付けの大原則として、「あるものは付く。無いものはつかぬ」・「根を切れ」・「続きを言うな」と教えられ、転じでは「付方自他伝」の手法を重んずるけれども決してそれにとらわれないようにさとされました。これを芦丈先生は「芭蕉の心法」として、教えられたものです。

「芦丈翁俳諧聞書」には、芦丈先生捌きの信大連句会作品第八号「雪」の巻が連載され、先生の自解が付けられておりますので、これを説めば芦丈先生の作品の特徴も面白さも十分読み取る事ができるでしょう。

たとえば、この巻ウラの一連に、

- 十六 土にはほせて早き物の芽
- 十七 花の道善の網にも続きぬて

十八 菓こぼれ雀どこぞにか鳴く

とあるのは、猫蓑なら十六・十七・十八ともに場（人情なし）の句として嫌われるでしょう。

芦丈先生は、十六は畑か何かで植物の句だし、十八はお堂か寺の辺りで生類が出ており、変化しているからよいとされたのでした。このように、はっきり理由があれば、自・他・場それぞれの三句続きでも否定されませんでした。これが「芭蕉の心法」というものであります。

私は連句というものは、世態人情諷刺詩で、世態や人情にわたつてあわれな事、おかしき事を詠んだものが、読む人に最も感銘を与え、すばらしい作品だと考えているのですが、この点は芦丈先生も同様で、ことに恋句は連句の花であり、柱であり、魂であるとして尊重されました。そして、次のような句を掲げて実作の参考としておられます。

- 1 ちさき店出して櫛田の出はづれに  
二親の日もまゐる墓なき
- 2 濡足袋で直に火燵へ入りこみ  
教へて云はず掛のことはり
- 3 政子の石のぬき人肌  
膝なんど濡らして給へと稚児を抱き

1・2は別に註は不要でしょうが、3は人の赤ん坊に尿をかけられると子供が出来るといふ迷信と、鎌倉鶴が岡八幡宮にある陰陽石とを付け合わせたもので、1・2・3ともに恋とか愛とかの言葉は一字も入っていないのですが、恋の至情のあらわれたものです。

これらは、芦丈先生の豊富な人生体験と温かい人柄により生まれた個性的な句で、これこそ世態人情のあわれとおかしみを描き出しているものでしょう。

## 式目の簡素化と厳格化、芭蕉の式目観

東明雅

平成十一年（一九九八）年四月十五日発行

「猫蓑通信」第三十五号より転載

質問コーナー

【Q】 連句人には、式目を簡素化したがる傾向と、厳しく意識する傾向と両方あるようですが、芭蕉は連句の式目をどのように考えていたのでしょうか。

【A】 俳諧の式目は、元々連歌の式目をゆるやかにしたもので、当時最も権威があったのは松永貞徳（承応二年没）の「俳諧御傘」でしたが、芭蕉はこれを「信州がたし」として用いず、梅翁（元禄二年没）の「俳諧無言抄」を「大様よろし」として推奨しました。これは「俳諧御傘」の項目を大幅に減らし、証句を掲げて簡素化した点がよろこばれたのであります。

また、門人の中には、いろいろ差合を解決する為、蕉門独自の式目書を作つて欲しいと願う者も



あったようですが、それらに対して、私に式目を作るなど甚だ慎しむべき事だことわり、差合のことは、その場、その場で適当に考えればよい事で、まずは大体の取扱いでよろしいと言っております（三冊子）。

この事は、去来も「先師は、一応は法式を用いられたが、それに拘泥されなかつた。何か考えがある時は古式を破られる事もあった。しかし、自分勝手に破られる事は稀であった」（去来抄）と述べている所と重なりあうところでありましょう。

右のように、芭蕉は当時の俳諧の式目を信用せず、従ってその権威も認めておりません。差合が起った時は、その場、その場で自分で考えて処置しました。そのため、その解決が古式に合う場合もあり、合わぬ場合もあるのは当然ですが、合うのは偶然であり、決して芭蕉が古式に合わせようとしての結果ではありませんでした。

貞亨式海印録（安政六年自叙）の著者の原田曲齋が「よくよく考えてみるに、蕉門で専ら用いる式目は、春秋の句はそれぞれ五句去りで、三句から五句まで続けてよい。夏冬の句はそれぞれ二句去りで、一句から三句まで続けてよい。花は一折に一つ、月は面に一つで、月と月との間は五句去りであるという外は、凡てその場その場の臨機応変の処置である」と言っている通り、芭蕉の作品には、たとえば「巻の中に恋の句のないもの、表六句の中に神祇・釈教・地名・人名などが出る巻、同字三句去りを守らぬ巻、発句に出た字を挙句にも再出した巻、素秋の禁を破った巻など、数えるに違がありません。

これらの現象をとらえて、芭蕉は式目を事実上簡素化したと見るか、反って後世の人にいろいろな迷を残す事になったと見るか、これは皆さん、それぞれのご判断におまかせ致したいと思えます。

## 温故知新

8. 名を正す 俗談平話を正す

### ●名を正す

論語 子路第十三、三

紀元前四三五年前後（孔子は紀元前四七九年没）

子路曰、衛君待子而為政、子將奚先、子曰、必也正名乎、子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正、子曰、野哉由也、君子於其所不知、蓋闕如也、名不正則言不順、言不順則事不成（中略）、刑罰不中則民無所措手足、故君子名之必可言也、言之必可行也、君子於其言、無所苟而已矣。

### ・読み下し

子路曰く、衛の君、子を待ちて政を為さば、子將に奚をか先にせん。子曰く、必ずや名を正さんか。子路曰く、是有るかな、子の迂なるや。奚ぞ其れ正さん。子曰く、野なるかな、由や。君子は其の知らざる所に於ては、蓋闕如たり。名正しからざれば則ち言順はず、言順はざれば則ち事成らず（中略）、刑罰中らざれば則ち民手足を措く所なし。故に君子はこれに名づくれば必ず言ふべきなり。これを言へば必ず行ふべきなり。君子、其の言に於て、苟もする所なきのみ。

### ・現代語訳

子路が尋ねた。「政治危機に陥っている）衛の国の君主が先生（孔子）を招いて政治を委ねられたとしたら、先生はまず真つ先に何をなさいますか」。孔子は答えて「必ず物事の名を正そう」。子路「これだからなあ、先生はじれつたいんだから。（この危

急のときに）なぜそんなものを正すんですか」。孔子「由（子路の名）よ、君の頭は粗雑だね。君子はよくわからないことについては口をつしまなくてはいけないよ。名が正しくなければ事態を正確に捉えることができな。事態を正確に捉えることができなければ事を成し遂げることができない。（中略）刑罰が当を得なければ、民は安心して手足を伸ばすこともできない。だから君子は物事を正しく名付け、名付けたら言葉に出し、言葉に出したら必ずその通りに実行しなければならぬ。君子は決して言葉をいいかげんに扱ったりしないのだよ」。

### ●俗談平話を正す

『祖翁口訣』（筆者・成立年不詳）に、芭蕉の教えとされる言葉

俳諧は中人以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覚たる故也。俗談平話をたださんが為なり。拙きことばかり云を俳諧と覚たるは浅ましき事也。俳諧は万葉の心也。されば貴となく賤となく味ふべき道也。唐・明すべて中華の豪傑にも愧る事なし。只心のいやしきを恥とす。

### ・現代語訳

俳諧は中流以下の人のものという誤った認識は、それが低俗でありふれた言葉だとばかり考えるからだ。そういう、通俗的なありふれた題材、言葉を、詩歌として磨き上げるのが俳諧というものだ。くだらないことばかりを扱うのが俳諧というのは浅はかな考えである。俳諧には、万葉集と同じような意味がある。すなわち地位階層の上下を問わず味わうことのできる道なのだ。唐、明などの、中国の文豪の作にも劣るものではない。いやしい心をもってそれ

に臨むことこそが、恥ずべきことなのである。

『去來抄』 去來 宝永元（一七七五）年執筆

妻呼ぶ雉子の身をほそうする 去來

初めは「うろたへてなく」也。先師曰く「去來かくばかりの事をしらずや。凡句には姿といふ物有り。同じ事をかくいへば姿出で来る物を」と也。（先師評）

先師曰、世上の俳諧の文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入し、辭あらく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさかしくまぐま迄探り求め、西鶴が淺ましく下れる姿あり。吾徒の文章は慥に作意を立、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云ひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいひとるべしと也。（故実）

解題●孔子は、言葉を正しく使うことによつてのみ政治を正しくすることができると言つ。これとやや異なり、芭蕉が「俗談平話を正す」と言つとき、言葉の持つ表現可能性を繊細に汲み取る、といった方向を主に考えていることが、雉子の句の実例や「懐かしく」という言い方からうかがえる。しかしこの二つは決して無関係ではなく、むしろ通底していると考えらるべきだろう。政治に欺瞞的な言葉、汚い言葉が溢れるときは、詩歌が亡ぶときでもある。

かつて退却を転進と言い換え、全滅を玉砕と美化した時代は、詩人が自らを偽つて戦争を賛美し、詩魂を汚した時代でもあった。今また事故を「事象」と言い換え、何事も「く状態」と付け加えることで事態を曖昧にする類の「玉砕語法」が蔓延し、政治家は前言を弊履のごとく捨てて恥じず、口汚く人を罵る。名を正し俗談平話を正すべきときである。（齋）

## 事務局だより

●第二十二回猫蓑同人会総会が開催されました  
（前号既報）当日の歌仙作品七巻は、今号のP2～P5に掲載しています。

●平成二十四年度猫蓑会総会（第百二十二回例会）が開催されました  
七月十八日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて平成二十四年度猫蓑会総会（第百二十二回例会）が開催されました。議事ののち、八卓にわかれて歌仙を興行し、全席披講ののち、午後五時に閉会しました。当日の歌仙八巻は、今号のP6～P9に掲載しています。

### ●今後の予定

●芭蕉忌正式俳諧・明雅忌（第百二十三回例会）  
十月十六日（火曜日）  
十一時～十七時（受付十時半より）  
於 江東区芭蕉記念館

●平成二十五年初懷紙（第百二十四回例会）  
平成二十五年一月二十日（日曜日）  
十二時～十七時（受付十一時より）  
於 ホテルフロラシオン青山

●平成二十五年藤祭正式俳諧（第百二十五回例会）  
平成二十五年四月二十五日頃  
於 亀戸天神社

●平成二十五年（第二十三回）同人会総会  
平成二十五年六月十六日（日曜日）

於 新宿ワシントンホテル新館

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

●山寺たつみ様 平成二十四年七月 五千元  
●中田あかり様 平成二十四年七月 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●平成二十四～二十五年度当番

●猫蓑会 高山鄭和 松原 昭 前田曜子 石川葵

山寺たつみ

●同人会 内田遊民 永田吉文

●猫蓑会オフィシャルサイトをご利用下さい

明雅先生が「猫蓑通信」に連載しておられた「東明雅の連句Q&A」を、簡便に閲覧できるようにしました。「連句入門」のページから、Q1～15、Q16～30、Q31～43の三つのパートに分けて閲覧できます。また、全項目を順次連続して閲覧することもできます。日常、連句について疑問に感じることなどありましたら、お気軽にご利用下さい。  
<http://www.neko-nino.org>

季刊 『猫蓑通信』第八十九号

平成二十四年十月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社